

陽差しの中で

写真は、ご存じのとおり登下校時に校内に見えるブロンズ像です。創立20周年に際して、同窓会から学校に寄贈されたのですが、作者は本校の第2回卒業生の中川信明さんです。金沢美大を卒業され、現在は石川県の特別支援の教員として活躍をされています。

タイトルの「陽差しの中で」は、まばゆいばかりの陽の差す中で、自ら進んでいく道、「未来」をしっかり見つめながら歩んでいこうとする君たちの姿を象徴しています。凛として清潔感のある秀逸な作品で、本校に勤めることになってから改めて彫刻（立体）の持つ魅力を感じることができました。



いよいよ卒業式が来月と迫ってきました。今年で40回目の卒業式となります。

毎回繰り返される卒業式ですが、その都度、入学当初の姿と様々な出来事を思い出しながら感慨深い気持ちになります。厳粛で校内外に誇れる卒業式であるからこそだと思います。今回も創立からの節目となる40回目の卒業式が、さらに誇れるものになってほしいと願っています。卒業生はもちろんのこと、在校生の皆さんには、新たな道に進む先輩達を励まし、記憶に残る式典になるよう一人ひとりが意識して臨んでほしいと思います。

さて、卒業式は正式には「卒業証書授与式」と言います。全国の小中学校や高校、そして大学でも実施されていますが、必ずしもやらなければならない式典としての規定はありません。卒業証書を簡単に手渡して終了、としてもかまわないものです。しかし、日本では様々な来賓も招いて盛大に必ず行われるべき式典と位置づけられています。

卒業式は、1872年（明治5年）に学制の施行からしばらくして行われるようになりました。初めての卒業式は、陸軍戸山学校で行われた「生徒卒業式」ではないかと言われています。現在、卒業式は学校教育法施行規則によって特別活動（学校行事）として位置づけられ、教育課程を全て修了したと認め、そのお祝いをする式典です。そのような式典は日本と韓国でのみ見られる習慣で、欧米では大学の学位授与の式典はありますが、日本のような各学校の終了ごとに祝う式典は行われていないようです。

卒業式は、最後の授業です。そして、世界において珍しい独特的の行事です。大切にしていきたいですね。



白線流しの舞台になっている大八賀川（斐太高等学校前）

アレックス - Own work

卒業式に合わせて「白線流し」という伝統行事を行っている学校があります。フジテレビでドラマとなり、『「白線流し」を知っていますか 18歳の別れ、旅立ち』（出版社：角川書店 フジテレビジョン／編 フジテレビ出版／編）という本も 1996年に発刊されました。

白線流しは、セーラー服のスカーフと学帽の白線を1本に繋げて川に流す卒業の儀式です。舞台は岐阜県立斐太高等学校前の大八賀川です。1930年代の旧制中学時代、男子生徒数人によって学帽の白線を取って流したのがきっかけで自然に始まったとされる行事ですが、男女共学から制服（セーラー服）のスカーフも加わるようになり、戦後、生徒会主催となった伝統行事です。川を挟んで、校舎側に在校生、対岸に卒業生が並び、冒頭で卒業生代表が挨拶をした後、在校生が「送別歌（学校オリジナル曲）」を歌い、対岸に並んだ卒業生が「巴城ヶ丘別離の歌（学校オリジナル曲）」を歌いながら1本に繋いだ白線を流します。そして、対岸に向かって感謝の言葉や励ましの言葉を掛け合い、卒業後も変わらない不变の友情を誓い合います。

斐太高校は進学校です。その影響で国立大入試が卒業式と近いことから卒業証書授与式を欠席する生徒が増えるなどしたため、一時活気がなくなった時期もあったようですが、昭和40年頃から生徒会の「卒業生を送る行事」として復活し、平成8年にはフジテレビ系で「白線流し」という学園ドラマが放送され、全国的に注目を集めようになりました。

斐太高校の制服は、学ランとセーラー服といった昭和時代の伝統的な制服を維持しています。白線流しが制服の流行に左右されずに維持した理由かもしれません。しかし、現在の男子制服には学帽はないため、入学時に生徒会より白線だけが新入生に贈られているそうです。「白線流し」、一度は見てみたい生徒会行事ですね。

本校では、卒業生退場の際にクラス生徒が担任へ感謝の言葉を述べるのが伝統になっているようです。先生方、特に3年生担任は、皆さんの進路実現と様々に関わってくれた他の教員の思いを感じながら、3年間の教育課程を実りあるものにしようと心血を注いでいます。それが完結する瞬間、それが教員の卒業式でもあります。素晴らしい卒業式になることを期待します。

白線流しの画像を貼付していましたが、著作権が明確でないため、削除しています。